

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：37502

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23114

研究課題名（和文）検注帳編年目録データベースの構築による荘園制研究の転回

研究課題名（英文）Changes in Estate System Research Resulting from the Construction of the Kenchucho Chronological List Database

研究代表者

赤松 秀亮（AKAMATSU, Hideaki）

別府大学・文学部・講師

研究者番号：30844120

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中世の荘園・公領における徴税台帳である検注帳および関係史料の収集作業・分析を行った。その結果、中世前期から後期にかけて検注帳の記載方式が転換していくことや検注の実施が集中する時期を把握することができ、中世の社会システムである荘園制の変動との相関に一定の見通しを得た。また、それをもとに旧豊後国の荘園遺跡においてケーススタディを実施し、パンデミック下でのフィールドワークやGISを用いた土地利用状況の復原方法を構想し、中世の土地開発過程を解明するうえで新たな知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1：検注帳および関連史料の収集について。関連史料を網羅的に集めることで、検注の実施傾向を全国規模で捉えることができた。また、特定の時期に検注という土地調査が集中した要因を多角的に考察することができた。  
2：旧豊後国の荘園遺跡でのケーススタディについて。1980年代から90年代にかけて、フィールドワークによる荘園研究は大幅に進展した。その一方で、現地景観の改変や過疎化の影響により、荘園故地に残された歴史情報は減少しつつある。GISによる土地利用状況の復原作業や、それをもとにした効率的な現地調査により、土地の来歴を探索する汎用的な分析手法に到達しつつある。

研究成果の概要（英文）：This research addresses collection and analysis of kenchucho and related historical sources that served as tax collection ledgers. The research showed that there were changes in the registration method during the period from the early to late medieval age and that there were times when kenchucho was intensively conducted, which led to a view concerning the correlation between kenchucho and the changes in the estate system, a social system of the medieval age. Based on this view, a case study was conducted on estate remains in the former Bungo Province. The field study, conducted despite effects of the pandemic, and the use of the GIS to conceptualize the restoration method of land use conditions led to the acquisition of knowledge on tracing the land development process in the medieval age.

研究分野：日本中世史

キーワード：検注帳 データベース 荘園制 GIS フィールドワーク

## 1. 研究開始当初の背景

近年の荘園研究は、2つの潮流に大別される。1つは荘園を国家的な制度として捉える荘園制研究、1つは荘園現地の内実を明らかにしようとする在地社会研究である。2000年代以降、前者では中央権力の動向からみた荘園制像(中世前期:立荘論、中世後期:室町期荘園制論)が提起された一方、それは中央権力から見た体制論で荘園現地の実態は捨象されがちとの指摘がなされている。後者では村落や地域社会の実態に迫った様々な研究が展開されたものの、各荘園の実態が精緻に解明されるほど、それらを総合し在地視点からみた荘園制像を描き出すにはいたっていない。荘園制研究と在地社会研究との乖離は、現在の荘園研究が直面する重大な課題となっている。

こうした課題を解決するうえで、本研究で注目したのは検注帳である。検注帳は、荘園領主が年貢収取のために作成した土地台帳であり、地名や耕地面積、納税責任者、耕地の現況など、徴税に必要な景観情報が記録されている。代表的な研究としては、富澤清人『中世荘園と検注』(1996年)が知られ、中世検注の実態解明と検注帳の史料学的な分析が明らかにされている。しかしながら、領主が現地の把握を行う、検注という営みの歴史的契機や意義は明らかではなかった。

そこで、検注帳を悉皆的に収集し、検注帳の作成様式や時期、地域にどのような傾向があるのか、領主が現地を把握しようとする契機は何かを解明し、その背景にある荘園制との関係を追究することで、検注という新たな視角から中世の社会変動を捉えることが可能との着想を持った。

## 2. 研究の目的

本研究では、検注帳を悉皆的に収集し、検注帳編年目録DBの構築とその分析を目的とした。分析にあたっては、領主が現地を把握するために検注帳を作成するのはどのような時期か、地域の特徴はあるのか、作成時期や地域によって様式に異同はあるのか、それらの要因は何か、といった傾向や特徴を見出すことを目指した。また、そこで得られた見通しをもとに、個別荘園でのケーススタディを行うことで、ミクロな視点での検証を行うこととした。

## 3. 研究の方法

データベースの作成にあたっては、『平安遺文』・『鎌倉遺文』・『南北朝遺文』・『戦国遺文』といった編年史料集や『大日本古文書』などの家わけ史料集、また各自治体史など刊本史料からの抽出作業を中心に行うこととした。なお申請時点では、史料調査による未翻刻史料の積極的な収集を進めることを目指していたが、研究開始後まもなく新型コロナウイルスの世界的流行が始まり、出張が困難となったため、刊行史料の収集に重点を置くことにした。またケーススタディについても、当初は美濃国大井荘(岐阜県大垣市)他での研究を予定していたが、同様の理由から研究対象を変更し、研究代表者の所属機関に近接する豊後国田染荘(大分県豊後高田市)での研究に切り替えた。

## 4. 研究成果

当初は、検注帳(耕地情報が記載された土地台帳)のみの収集を意図していたが、収集の過程でその複雑かつ多様な形態を改めて認識することになった。そのため、坪付や目録、注文といった検注と関わって作成されたと考えられる関連史料を含めて収集することとした。これにより、13世紀後半~14世紀前半と15世紀半ばに検注が集中的に実施されているとの見通しを持つに至った。近年、古気候復原による中世における気候変動の実態が解明されつつあるが、本研究で得られた見通しは、環境や社会の変動に対して、所領を把握しようとする領主の姿に迫りうるものと考えられ、今後さらなる論の精緻化を進めたい。また、検注帳の記載様式も中世後期にはよりフレキシブルなものに転換していくことは前稿で述べたところであるが(拙稿「中世災害研究の現代的意義と活用の可能性 - 東大寺領播磨国大部荘の水害と旱魃 - 」『歴史評論』831、2019年)こうした中世前期から後期にかけての記載方法の多様化について複数の事例を確認でき、史料学的な分析を進めていくうえでの手がかりを得ることができた。

ケーススタディの舞台とした豊後国田染荘では、パンデミック下で行う現地調査の方法を模索することとなった。1980年代から90年代にかけて、現地調査による荘園研究は大きく進展した。その際、調査の中心となったのは、地名や習俗、水利慣行などの聞き取りであった。しかしながら、現地景観の改変や過疎化の影響により、荘園故地に残された歴史情報は減少しつつある。そして何より、新型コロナウイルスの流行下で人との接触を最小限にすることが求められるなか、聞き取りに依存しない研究を模索した。具体的には、GIS(地理情報システム)ソフトを用いた土地利用状況の復原作業や圃場整備未実施地での簡易ボーリングを行い、文献史料の記述や文化財分布、地形と併せ考えることで、中世における土地開発の経年的推移に迫った。なかで

も田染落地区の研究では、11世紀の開発後、13世紀末～15世紀を画期に中心部が転換していく過程を詳細に跡付けることができた。

新型コロナウイルスの世界的流行により、当初の計画通りに実施できない部分もあったが、上記に述べたとおり一定の成果をあげることができた。なお上記の成果と関わって、採択期間中に論文2本を刊行、2本を執筆・投稿、口頭報告を6回実施することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>赤松秀亮                         | 4. 巻<br>100           |
| 2. 論文標題<br>いま、佐藤和彦の学問と向きあう             | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>『民衆史研究』                      | 6. 最初と最後の頁<br>13 - 22 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-             |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>赤松秀亮  | 4. 巻<br>998           |
| 2. 論文標題<br>南北朝期における広域的「村」の特質と機能 - 播磨国矢野荘の上村と下村に注目して - | 5. 発行年<br>2020年       |
| 3. 雑誌名<br>『歴史学研究』                                     | 6. 最初と最後の頁<br>38 - 54 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                         | 査読の有無<br>有            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難                | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

|                               |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名<br>赤松秀亮               |
| 2. 発表標題<br>十四世紀、播磨国矢野荘の位置をさぐる |
| 3. 学会等名<br>歴史学研究会日本中世史部会      |
| 4. 発表年<br>2021年               |

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>赤松秀亮                      |
| 2. 発表標題<br>播磨国矢野荘研究の軌跡と展望（1932～2019） |
| 3. 学会等名<br>東寺文書研究会                   |
| 4. 発表年<br>2019年                      |

|                              |
|------------------------------|
| 1. 発表者名<br>赤松秀亮              |
| 2. 発表標題<br>播磨国矢野莊最北エリアの基礎的考察 |
| 3. 学会等名<br>室町期研究会            |
| 4. 発表年<br>2019年              |

|                                  |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名<br>赤松秀亮                  |
| 2. 発表標題<br>中世莊園史研究における現地調査の歩みと課題 |
| 3. 学会等名<br>栄山寺研究会                |
| 4. 発表年<br>2021年                  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>赤松秀亮                            |
| 2. 発表標題<br>室町期東寺の寺院経済と莊園-廿一口供僧方による供料経営を中心に |
| 3. 学会等名<br>中近世宗敎史研究会                       |
| 4. 発表年<br>2021年                            |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>赤松秀亮、齋藤圭                            |
| 2. 発表標題<br>豊後国田染莊資料のデータ化による研究基盤の整備と新たな研究に向けた試み |
| 3. 学会等名<br>別府大学・モンペリエ第3大学オンライン国際シンポジウム(国際学会)   |
| 4. 発表年<br>2022年                                |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|  | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|